1973 Dis and John

A

大学で 中 山 秋 雲 n Ł 10 回 +j 其 时间 17

な

9 詩

> 工 滕

> > 節子

本

扔

太

部

荻 和 館 统 抠

木岩福

771

二六

養る

0

稿

洋

九

14

2 1

1

07 思

..

7 7

鈴木

席

天

子片见 のた

阿

霍 野

程 田 田台川足中

老

題

11 1 新 博 丁 少 幸 順 夫 康 み 仁 史 子 六五五五四 三八六・七

及

落

ル野和男生 英

生

粹

夫

詩集

1

六 1

集後記

残して死んだみにと、て、私のことからほど 後の息をひきと、下、これに、既終に立ち入 あえぎがからかはそうつぶヤイと、やかて最 気がかりであ、たからだ、かの病気は気性の だが、ようやく一年数か月で病人勝ちの私を 伝染病であり、 た叔母から、す、とあとで聞かされにこと 「あのチのことが八配で…」、高い熱に て遊病院」に開解されての最 大石羽太野

後に、たから、子ともたちはその場とい 1;

私を教年間預け、のちに再婚すると、私はう 頃、叔州から、母が大さは強りのある目をし 本はだれからも聞からればか、た、いくらか その話を避けていたのかもしれない。十学の りに引き取られた。七きかのことドワッて = . 切い私の養育に国、仁父は、他の町の家に 節すじの道、たきよいは人で、本下らい人 \* \* ... \* 1 ...

われていて、この点本に似ていたのだ 閩 神経質で内気 の見 F-から高 1= 1000 れた。とりわ マさた。他の兄たちにはそのような傾 レかい 4 . 20 ちで、 兄弟のはかで私だけが父 かされた。たしかに という 威 , F. K ż と一緒にと、 . -Acc 专 长尼瓢 t たなみは 1... 牧の境 3 各 大切 該を裏付 という叔母の該で 、そういう外形 ほど美男で :, があ かとり 私は女にいろ れた、法学部から RIT びことも意識 トな、て、自分 はことは、母がたいへん内気な 、ても応接に出 「将来のを望を選ぶ時にされ it b F にそのようは素質が強 はだが浅 on あ 17 7 A." 「の兄は事日香麗 \* , 下。母如写真 11 沙動 14 らよう 9 果い方 あ、 tä: 双ある いわ L. に似て目 兄を可管の かく さん 文学部 なみ K. な とよりも、 3 はも更れ 51 理 のを T= 闽 1. すずれ DN 私 , 3 一种 松 9 24 F で 13 とく ン現 向 + 中学 う。 Į. 4 7 8 カト

飲飲で温度の内面性をどのようにコント に私にだけ残してくれた母の性質が私を導 ともある。いま人生の行れ道でも、母の家の たのだろう。私がゲーテに学んだのも、彼が あ、た、 動するよりも、内面的は生き方を選べと、 かな空気に堪えかわて暗い街をさまよったと 臨終 質の にずるやいたのは、いわば七き水の声で のめの好の言葉に心を支えられ たしかに年少の後、私が炭をの冷や ため であ、た。ない実社会に出て清 F

ルして外の世界と調面を F けか、た 91 のた てめ

さのような作品だけにということにあ が受好してやすない人びとを考えてかると いずれる内面的な繊細な物を持、た人たちや かし、その中からぶるいドか 7 や思想家、画家や音楽状などをぬ、た。 私はさの後 何ーつかにつ 実に多くの断人や作歌、 4. いておらな こうよみ けて現在 1 17 があれ 哲学 .

落合君

たものですが、もう締め切りだという 通くなったうえに、うまく書けなか いろいろ御面倒かけて恐縮でした ことをよいことにしてこれを送ります これから教師の一番いやは書節です

な。御機嫌よう。 し等生識君を無用に古しめに到ですか

一月ニナゼ日

大和

生達の間からわう起り、なぜか知らめが の間にか、自分もされた声をあわせてい たりに見た、「帰れ、帰れ、 大学紛争が真盛りの時であ、た。今まで、テ レニや新聞でしか見たことのなか、たへル の出、朝刊の余録にその記事を見い出して トと覆面姿の学生を、 が大学へ入学した年は、どこの大学 入考式の日に自のあ しという声が学 師3 二。 ても

、得意になって文やみに、その様子を話して かせたのを覚えている。

りすると、何となく後めたい気がした。 うえでのことであって飲しかった。それ されに学枝側のロックアットもあって、授業 が荒れていた。毎日ほとんど討論会や集点 ほとんとなか、た、討論会や集会に反 そんなふうに、大学に入、た日から、学校 ではない 上聞争に参加している人に記去られた かったが、まともに授業を行 , F

なった。 か、た、徳和、後期一回きりの前除で二年に 関手を支持するだけの食見も勇気も持たな

来てみると、掲示板に「体語」の文字を見 出したりしたこともあ、た。 インコートに長靴、そして今をさして学校に ができた。雨の日、一科目きりの後葉に、レ れてきたこともあ、て、落ちついて過すこと ていた。この年は毎日の少くなく、学校に授 二年になると、いくぶん粉やも下火になっ

ちは、お財物いら有用名を吸り出し、有用小 なくてはならないのが面倒である、最初のう 日日、コートやバックなどをロッカーへ入れ あるし、と、ても居心地の良いへやである。 んから一階の雑誌至へと称、てい、た、ここ ームが特別温かく、それにいろいろと雑誌も は明かるく、夏は気持ち良い風が、冬はステ た。最初は二階が好るで、されから三階、そ も試験の準備や、検賞の下調べなどにであり この頃、四曾至日結構利用した。と言、 τ

と聞か へえ ても心をしかった。何故、て、 ゼミを選んだ。 三年になった クを持って堂々と入っていくようになっ ーしなどという顔で見られるのか、 れて、「大和ゼミよ」と答えると、 降は両層之までして、荷 - 年の散養課程を無事終了し、 、 下。 今 かわ ・ゼ 「ゼミどこにした 以上中四四 リドスラは木 111 11 , 7 , ゲーテ」の大 7 の心 マゲーテ 纳 9. を持、 をロッ コート しな 4 1 刀一 \_ ٤ て入 和 ti 11 7

間しという題 からであ di t刀 生をあの厳 で、威 きの 年 にひきつけられたのであった。それた ま り蔵 も合 何 じかべ る。ゼミの手引を見て ٤ 4 よか、日、これでゼミは決 「看きフェルテルの心 佰 ガンよきよせして、活気 東な研究室に動れた時、とても 目と、そこに添えられてあ、た でなか、たし、わ の話したいや漱石の の後、しだいド活気が 、「文学と人 からな で カト 上至 E

がは現味深かいものがあ、た。 較をした。キリスト教と仏教の違い

も三癖もありそうな文学家強氏の話しを開 聞くのはあもしろか、た、特に我人かの一癖 のは実に興味深く、また火へんな秀になった。 クヌルア」、「シッチルク」と四つの作品 ついて酸し合いができた。皆の意見や考えを には、 前すで、マグレ、現実の社会というものを E. 「鄉茲」、 になってヘルマン・ヘッセをやること 「ケルトルート」

するのか、う、すらとだけど分かりかけてき た。だけど今は、お世文学というものが存在 ガくあすすぎるように見、たりしに時もあっ 見た場合、「ウェルテルがどうだこうだ などと言ったり考えたりしているのは . 何

ろが、きの中で大和ゼミでの二年間が一番見 い出多いものとなりそうである。 今や、大学での四年間が終わろうとしてい

斤山秋雲

なけなしの

と昔に知、てゐた、

たとえば 凡のひ笛に

ず、と昔に知、てわた。

笑うことを病、

T

h

F.

舞うことを知っ

7

る

F= .

E F とえ とえ 12" 13" 花屋 竹屋の裏 の哀 i i .. . 声 声 1= 1=

強人 ことを知ってあた。

醉、て醉、て醉、はら醉、はら

酔いに酔い

10

.. 7 吐 11. T き散らし

何処とも知れず

壁をかけ。

置き去でたものに

11

酸りかかり

液かって

時け数り

尚をある。これの調になれてもといった。

坐、てゐる。

不思議と

冷めたいたの上

1=

尚

,

思いる意。

生蔵が死を意味でるという 9

12.

赤見口帶小二

聖山の間の中で塩れてみる。

受難の時を刻んで行く.数全の顧の音は

## 旅のメルヘン

文は死んだ……

注がれた洞が高しく私れた 好と後は慣れない在事を始め F

翌朝

無アドがよく微笑む。

特質な暗でよく微失心、

学は母親と小さな家に住むことだとい 名前はあじいさんが パンジーへ花が大好きに 付け という。 てくれたという。

自分が編んだというかがっく、たという

風 17 冷 め F-DI E

小 沸水 u F

F D<

..

为 筲

14.

再び討れる Tà 11

記れるをし E 八十 17 もうー にとどめ. 度 だけ ようとし

岳

何何何 が不自 つ答えごことができ 田 Tã 9 かと 时 11 E 芦 なっく され サー

TI 15 17 Tà 11

気障な笑いがストレートの道には、

福, 下安 こう Z יום ζ 11 מי . . 9 3 部 屋 E H 1= T=" 17

愛せ ス 3 8 9 11 0 何 世 果 \$ Tã. 1= 11 12

何 何 ימ 不满 一つ弦 Tà IT 0 Tã 100 11 ٤ < 时 七 LI |= F F 7

Ti んと 14 12 碃 h tà n N\

稱 、經痛 经痛 極痛

未知ら的旅路

本当に静めです、 ヒトリデス。

小 げた 'N

味独今は た

9

本当に静かです。

間またいのです. 今は かれは妖精の婚礼の調べ

7

飛 自然 X れなかう小りでするといったの奏でるシンフ ころい の弱き歌 フォニ 2 さ兄妹

13" 九大 11 木 一年《煙學 0 2 tã 楠 性・上

潘 4 14° h Fe 15

独 17 , ちで व

肩して下 今 杨 17 顧 です 2 4

リック一杯 万金では買え 1= 詰 TJ Ø \*\* ð 9

き、と

澄从わた, 下青空の日に

れして下さい

水芒鶏が

水水色

ないか.

飛べない

悲しいか。

Lebe wohl!

僕の箱、過去の小さな

我楽告みはおれた

然える姿にいれまし、か。川の流れにのせましょか。

小さいながらも重すぎて僕の小さな男い出類は

**疲労感。** たさて

始めましょうか、

始めましょうか、

能產路

打ち上げし

哀しいかの TÃ A ti

遊島

春が同じた ぎう る前 して 12

敦俊与も湯いて

あびたはどうなさる。

地帯の何のが名為で

サナ・サテ

あがたほどうなさる。

的公化

わたし

演技者ならば

何を演じて見せょうか。

7

· サー

に舞台裏、

病・て

7

見せようか

サテ・サテ

ザナ・サナ

逃げ出すか。

演じて見せょうか

悲剧

58.

あなた ほどうな さる。

たしはどうしょ ・サテ

ピー **补!** 

されは彼の名。 サビーネ!

それは恋する根 ザビーネ!

マザビ ーネ!

自由なんだ。

君は

野き題ける馬のように

リネシビ

25.

世でしま! ないない かけき!

それは応する娘のみ

サラバジャを

I

## 敬和館然花

したいていは何ら がなかな ある・ ドさんがとび起きカー 以上は気の合、た指同志が同室になれるのだ て私も下へ降り、こうして一日が始まる 計、午前九時、ベッドで海ていた同 へやは八畳の二人 かうまく = いかない場合 かの形でがまんす たたき テンをサッ・ ~ やであ 鳴る かかりい 3. = 意 つの さが、耐 室岩 二年生 ので 日 i 0)

い者も 四十名程 オガ遊 受付 の取 性のみ らん るのがた してん り次 113. には経 Ti ラケで大将まで、動務で、 であるが、 えていると想像するのだが、なか くな、た人は療を が、ここで生活して で人当りが ぎや諸事務をや、て まにさずである。 窪 田さんと どちらだか 良い。しかし時 いう上品 7 11 ていく ti To 到断 る。 もちろ 4 闰 ・現れ えん h 12" つけ 樣 \* 3 21 有

ぞう 3 歩くやは遠くから見ても一日で見わ 人以群種 西高 约 -すた先 T 9 |= To F る高 もに電話者 £ ... 林 ても 見え、 之 棋先生から ぬ茶 ちょ、と横 で時々受付すで出て来て野臭を放 生は大好 生は 在は産 士 日本女子大出海の才 カミ 二年卒前下例 である。 = 人 1= さで三匹も何、て ا 放してる 4 かあり、 のガー その 代 3 から雪 本のより 時 代る受 ピス 03 2 03 は楽 DS けられ 柳 w 3. 女であ 芝 付をす ピろ 主率 生 3

樂で自炊 は機入り前に訓練してあ 上 どうである 11 1-・これは前天野学長の いて つつ 3 きそうである。 (先 かのでる Ç1 じいし 一談話堂、前下は ているが、これらは豪生 ・また炊事室 ~ のだそうだ 多川 11 3 日自分で作らなけれ ・レか 3 意 かわば 女 しか それ i 、浅湿室 性 世四く) どうみ かれー しな は炊奉 という主旨 カバ 7 か o 12, 階 な 化 5 TI 退

17 いる て風邪 で奏のすべ裏 時 יום 半にボ から十 この世 をひいてしまう 一种 1 仁住 甜 ラーが消 をしている ものな人とこと 2 でいる。 · 冬 マルるド コマス d ナ め 冬 7" 12

中のとが見えな 放十 へやい暗 入口 二時消燈。 のドアの いのは様 けて " I i 必 うにして 70" Tà カヽ T. 7 i 9 芝生が見 ス ス で上級生 |= 7 ある。 M > をは · S は 回 17 + 引升 ") E 计 に来る = 時 マト 11 T 5

え 187 くてもがまんする場合もあ めドア トを消しラジオのボ : とあ 3 0 1= b Z いて 9 -F. に解をかける。時 3 またもど、て結 が、それを最 パの音を聞く 1 2 1 近 1= 6 局 先 3 11 ムを下げ、 就 da . 通 +1 4 17 生も六 水 Tã in V 9 4 一勢ドラ h |= \$ 5 3

時とタオ九時半に必ず点呼があ、た も、(当時は今 一年の頃 LI p 7-いやでた よりも、 とき まら なシャ、 Tà 71 った 种 + 生

らず希望をいだいてこの療をあとにしてい を学か、それが辛業して役に立てばと少な 1. てみて悔ばな ・人生のこのわずかな英同生活、 ると卵が一つなくなっても結局は泣きわい あかし、ゴーゴーを踊り、時に りな思いながめ !)もう出なければならないと思うという けんかをすれば数日口もきのず、我しくな まび社会生成の中でありとあらゆること 11 く、てく る、夜 明けまで飲 は語りあか 私は体験し 9 7

## 駄句三つ

にかかたくながかめ年の春

大賞」をさきいて乙女族する

狂せるやから列島にあかれ年を越

大和先生年賀伏 4

しかったのは、

過去でしかなか、 晴らしか、たの F IX

現たの自分がいかにみじめであるか、ない

はよくか。ている

したくなるような今日の僕。 えたいの知れない不安に襲われるは注意な ないないそして時い暗い地飲の底でもない

作りごとなんかではないのだ いるような目がを威ずる時、それは決して .

神のいたずらによって作られた僕のこの焦燥 人間のいや鶴城のいやこれも違う、そうだ

しかし、しかし、どうにもならない。 ても 、ときどう暮々として何かに興ずる。

物に来、ていかわけでもないのに頭がいたく 近便はとくに、この傾何が看しくなった。

なる。

知識であり てもならな ただ、ひたすら 7 . 11 Tã 5 に何かを求める。それは、 T い、そして、人間であ

けず、しかも私の想像する理想言なのである 私の欲しい のは、自由に、何 才初 ◆東将→受

気が在、ても隣 力 T2 ..

許を言う下

あめ、 やして、美しさをひたすら求めてい 物を言るたい 現実よ私を裏切らないで欲しい F

馬鹿人しく及 生活を真面目上考えることさえも自 **風知れ的不安が私を包む。** 毎日毎日、うんごりするような 《音 るようと思えて に混 Ü, えるようになってしまった。 7. 私にはど 11 こかで少 生活。一体 M 1= では

ならな

山何 それは私の運命の鼓動であり、情容赦のな 物かのカだ。

威情のほとばしり出るような人間に会いた

「我々は今のききではいけないぞし どこかでこんなささやきが聞こえる。

どうして ガゼミルまきではいけな 11 のだ。

のあるような奴がんかいるもの 私に不安があっても、い、たい、 701 他二不満

傲慢が自分すことばにあきれる。

要替ななのじ、

物言いたげない

悲しけなか

中なたい

私の心は私のものだ。

あんたけんかにやるものか。

大事にしょう。私の心は、神様よりこ

左 3 3 の下 めだ 17 てきまい. きして、 101 神様 E 7 TE' 神様 7 7 礼 な 私 0 いい 9 10 1= 3 内 む 1=

17 W 自由は 私 雨 w 0 0 悲 ゆ、たりとした、 F=" 自 h i 光 . 1= 山、きれけな の者を開 輝 光 何か やくものなん Tà 4 が私 11 DN 7 む のちの命 必要じゃ の声をさえ u しわ、 っ かじゃ £ . 17 蓝 いなの ti 11 明暗 1, 3 一性 3. 1= 3 F. 自由 ひし

なめだ。

私 私 1 **7**2 11 500 わ 念 いる の動 1. 0 こわ 強い 11 3 Ti 私の 強 1 11 9 41 D 1 12 い 私 私 だ 9 9 15 15 R 13 黃 1= Ti

01 7 れ合 7 1、私 の失で AR できん ş Ti 必然 7 5 ろし h 3 11 せうな

17 どうした 与綿 和 にに 面工 かいしら 三年六月 7. = **A** .

てしまうのだといふ不安ト意はか C 欔 と同時 が出来ない 悦と不容と、この二つ さうした充豪を ほど素晴し は夜、何 にこれ · · かか のだ。そうしてこれは、 跳 0 もきにすぐ済え去、 7 ŦT 的 7 " Tã 5 は引きかすこ " 上 ると げら と見ふん 、喜 h 3 F

瞬 Ti 的であ、 て:そ 一層美し ., ちゃ

クスルアより)

## オ ス 7 1 0 Б • 7 脸 木 ₹ 魚

20 日中 3 T てレコ di ンクフル 七月十 で冷 下。 窓 17 13 力 飙 う Z 汉 7 モッグ 六 納 所削 からの東京 6) 1= Ħ てで T =" ガドル 1= 13 5 展 何 何 怖 130 9 けて 田から しい 791 の夜景 の夜 出 L F かの 路 7 \$ \$ 潔 11 L ン のこ 0 12 1 戸と底 時間後 よう カレッジ経 व व た、飛行機 か異奮して on らしく 郡 であ, ト いなが 市を酸 ドア 大 i ト衆 5 in 田 ラ 7 E Z i

先に 3 更 h 力 1=, 0) ず自問せずに 本当にここが 7 カナグやアメ で返事さん > 日本円 70 カラアン V ジ 12 F 上記者でし が便え リカ アラ いられ ド到着 đ 1= ス があ ろ し、 あ 力订 强 7 TÀ L 3 A. かった。 (1 9 d E ٤ 1 T= 尋 D\ 1= > 1 Tà わたら、 を見 ととと 11 11 10 > ~ 国 F= あた 左 忠 F

クフ 教々と追 カトバーンを暗遮るや口で走、て それに参考せかだく、中常の場合 4 てつか と思うか ルック 73 ラス トからパ に何かう 1.1 を破って出 天 … 趟 にでもいる気分であ、た。 して Z のである。このバ が大きく間 でオ いくのであ ることにはっている ーストリアのイ かない 3. のである。 スが 10 11 もベンツ 日本の ンマ ンス 7 ラン P 7"

ドナウ インスプル、クは山に回 "1 A支流であるイン川が流 きれたところ かてあ

自であ 柳柳即印であり、日本との交流は今年で百事 茶香オリン 山色見上丁 のか、しという有品は句を言、たりしたとこ イタリア紀行を始め、リルケが 2 てある。 0 1 " 30 ピックをや、たところで、 インスアル、りは東京と同じ年 到了 「何と山 である。 和机 かつてゲー の胸にせ 稿 \*\* 于 di NY 7 工 " " いわば < 5 3

なり、極 ツ能 過內 刀遊けたが、店に入 1= いると英語 を使う ると英語で記 9 ,, po

全 dh 3 2 É 7 思 のだ。 3 P 7j 题 12, 17 う 7 11 6 J. すら 11 23 0" 2 T 0 3 人連日生 程這 爬 しかし言葉で相手を完合 1 ۲., < La う でを強 To PA 3 でも産 15 . 11 3 0 0) 3 ż 日本 17 で気 何也以 沽 0 师 猴 ド行け 0 A ル温 ぞの 9 ら電うの での諸学はあ なう 7 杜 方 内產 ドイ 11 9 6 W けるが物で T であ 10 V > ツ諸 h 1= 3. う I 407 E. 11 色論 カト 1= できる 7 3 9 1-延解 ð 4 ं 7= 1 でき 3 i らず最 1 1= も完 9 1 6 であ व 7 " 13 7

チド 人心力学温 11 祭しむ か 3 2 k エクであ 何 \* 6 7 01 しわ 看 みた こと第一であ 17 できなかったりすると、 13. 4 そう人 1= 3 楽し 101 7 in 7 性 à Ti されてしる 70 11 7 々きはい 7. むコッヒい 700 ンス 4 月 る、意味ん 微 ラ 似等に違 7 らの真 1= 7 らかい さい シマも、 1 Ò うも 7 ると 7 愈 1= 4 24 西 う i 11 かをび 萩 对 7, る人は何 日本 3. レイ 台子 てくれ er のであ る學る 4 見了 下工 得て 3

記されるっき聞い さいとでりいるようには、と客心 かさきるできない 660 う いれ 固九 近 u, 4 コリモ、 ちょフロ本前で話 以縁ハイた、かつドラのド 上が開係おく。 てしま、た、イタ した。路岸 リア 办与

日帰りたくなり、帰っ し技 入るちの全部が独立していたのよ はくなる。帰ってきて間もないうちは、 つたいと見う 人間という人は奇妙がもので、外回 かしてしまい恋しくだ。 は他の ことで まらきりガンペンを置く A てくるときに行い 態をこれから先 てしき、 F この頃は レて ド行く 許学 てみ 田二 11

馬天狗を十卷 ていた)。何敬いとよく開 17 作 う、彼に、と、ても侵順は馬が、彼の子側 大 きがまに絶 した理山 だへ前のクラアをやめて翌日には入部 11 年 **T** 参 ほど、ラの中には白い馬 ではない。本を読んだ にクラ TJ' かのだ。 , て馬 ブを退部 術 その 部 カく 日人静しま 順点にら指すい れたも してま 世野 PE で人間 9 如此 F 順 一年 は T 文

而 步 於 も動物で渡る所 な業 しいだの こかしこ 、禄を…… 網い道で、 にあ、た。 かあ , = 11 3 う 彼 他の人たちは下馬して その一例を奉 丁馬 のだ、その日も に来った 17 Ī れば、 1,

失いごとではなか、たのだ、命 1 く笑われた 問 その魅力は私を捕えて能し われる値に先輩 だった のに。二巻 あのに かどにこの話を丁 しゃい 、三卷 1. IT し読み進 私上 1= かわ 6. **U**\ むう 3 7

01 小終, た時にはもう、私 であ、た。もはや耐えられ の胸 17 張 101 り製 , 17 E

いの触れたいもせまれるぞく かたいに上子に祭れるよう いうに至、下。万歳! 上が、 必然的い馬術部 に、私は運命に従、て、馬術部員と というフラブの存在 これで私も勝馬天的 には うし、馬との が将か

何という海地のかだろう?何とこうに さあ、初めて馬帰に連めて行、てもら、た

れいにしてや、て、顔を拭いてや、てい . 最初 奈れに時は常歩ではこけこかくだけ、 あという入れ、 かんて女の意地が許さない、頑張らなくちゃ 何というこ け書いてなか、たのはこ、幻滅、絶望、 えことをしなるでいずないんだううとあめ、 我必然協大学馬桁都には、当時自馬が二頭 しかし はほとん 入ってし とだり ブラッシングをして、足をき ど騎策できなか、た、而も、 了、た以上、今更下める 野馬夫物 にはこん きして

う姿態。時 シュ。どの奏頭らしいスタイ 1 である。 Ø, 故 眼差 in いてしま、た。早い前 号 ا ا ا H ٤,, という)だけしか しゃすく 网 ところが、常に片方 も思わしいの 湾 本 うと、もう一頭 には彼 く、人が近 は、その馬を一目見に瞬 游 く瞳。それら全 したような、時には 付 崇 だそうだ。とこうか 00 0 くとはんだり就 せても 一月饱 馬 再 ル、その優 17 クラ らえ (老の名 7 h ・その美 PET 7 Ti 何心 1= \*\* 7 来て 5 , F= \* L 何

扇にしてしま、たのだ。

声った。 2 午入小 TÃ たりす を恐 の私 1= 伏伏 目 に見 をや せて、正 18 ない彼 ミラ かいて る恐るや、てるのに、未熱 3 とかい シて 700 近 7 のいを摑まんと確 がし 行 " F= は無理と 付けば、 ヤリニか。 にらもう戦馬天物 ばしばあり、大変な 7 ・レルレ、何 17 啮 しても、顔だ けとんど教され 女 たない、 っ かれそ 起 とか先 18 男 1= どこう 11, 《先輩 う 而も 琴 1=

多すると、彼い合意る酸りのこと 意いれ、参り長とという意 る本は耐 めらゆうことをして頂 一年命の与目を演したの 合きの得 が出たる様 一段がどは死んだかを見っ 城 17 ・ママル 中が見る一俊する、て えに、歯を食 = る様 い、 た、 そこまで になり、ラシマ道には、足 になり、次節 いため いしば、て、ニュで質 であ The state of たこともある。 と、自 耐 けだ 3. = À にブラッシ か、ラルブ 3 : 6 17 rj 3 de ありし つかか 古小 1= まで Ta 12 1

## -

は出意 レオリ・ヘニか にた こんがに一生態命 FE', お恋から中見 E R 9 う人がいを 13 からしな が食馬 二:温 7, Fi 9 2 1 ... の益) 3" ţ "高" TF E ₩' , F= 9 ? 17 1= E L Ya 彼 7 OF. 2 學可 1=

なる人小でで、 でけ、 てや、 にり、 かん でも高い てや、トリ、何素桶を洗、てや、トリ E 以死 后, にり、いつもきかいな水 E. 他の対よりはず、とい 復 の島に人参を 4 6 11

T 他 3 6. 又 矡 6 E 7 13 と以 v = 11 T う f. う 思 的 いじ 既 < 7 うかい E K 6--1= E. 13 Ti Ł in L 40 本省 II 、て 4. L Ž tå たり、武 E : 7 < . 1 4 小程 が資 でも、 75 7 셹 の愛 rī Tì > B ") · 熱 情 て赤 で見 F. 7 " 0 して ろうとし 11 便情 ٤ 17 F 7 7 報 3 2 F. 7 11 う • 楠 Ti 7. • 3. 私心 13 湖 暇 . 4 1: に一生発 1= \* F 歐 が時、 1 変 きう 录 舅的 此 L 9 めらず F 4 7 7 F ti T A 1, 1-Ł 17 मंत्रे A \* 3 T 1=

-i ば 1) F 30 1 h 3 E 近 7 V の馬 V ? 7 17 13 本 东 のん 1न L 柯 'n Ip 4 かい 7 包 ト最 の前 包 < Ŀ i, 元 7 > p 下ん 2 K ti いりり h ) 3 4 V 剂 上五 . . . . . in 7 ŀ < FL 3 强 念 1 9 立 ti 3" ち去 A 輌 7 & Co , 上何 F 0, しに 7 本 然 そう 7 Ş ,, もし 何 U t 9 るろりを Ł 7 , 後老を一 りあっ ? 1= 0) 4. 飨 と私 に不 F L ti 15 E ろ 4 11 宁 # V i 5 : 南 7 9 方 7 何 E 13 75 9 物 ŧ 8 3 < 40/3 Ł < ŧ 4 13 7

ことをじ、と見つめるが、 から時が物かげから出て行くと、最 てしまうのだ。ねとばけが上舎なんだ レオリーは、 \*、てもいとあしくな、 てる、本 しそうな すべにき、 目っ てしまう。 \$ 7 ... 初は私の はを何 0.4 きん F

で行、に、他はそこにたる! 下海、魚縁にかられてレスリー もうたいくなったろうしいう子告 の馬舟 何故に 91 ts ト弱ん るか

在死 さして怪話をうい見 人かてや、ま、熱心に食べている。 レモ、私の気分に訪めかてで彼は哀レげに、 類自化了。 "世界 がしめつけられる。出来ることがり on (%) につつあるなどとは予想に なんで無に等しい、私を置きなりに はない、て家しくない、 レオリー ている、草を刈、て来て 中の日の て塩辛い辛を流 一七百 となっ 自分が現 1=... の憑 さん

最後 放梁 花で飾、てあげょうな。ふ、 気のすむようにす 好自行人於も一緒 がんて ね高 いりねを捨てて行 本のこと失為させに情意 と、おかてなん すであ前 した。慢 オ 12 くとき、て 似 江中又… 二日五 せて かできるんか にみげようか。 T L 7 マルる · 4 4 なってす、 レオ・ 1 7 极限 さり 130 め、鳥族な たんだ **†**, る前 ない で 4 [=' T F= めてねり 4: 4 あ前 简 公下 本を : 4

. レ続け T the 3 21 ら宣言 わま。

君玄リて

お宝の深ふかた からりて

かくれんと

がきるがられるというできた。

71 OA 医 £ . up 13 27-7 7 うとも、ない is ti 6 0 かばいいかめも 本時、春 7 PAT かった 40 その上 何 9 刘 應免。 その間 であ ほど聚な 9 1= 7 300 1= 山 は深淵 二 候稿を奏 にご愛情 ることを 18 410

クスルアょり

女性

にたいして

は、非常に不器用にしか接

4

b

:

1

い。正にヘッヤと本

0

英通

## 無題

田中幸史

くら をくぐった。 を持っている状態であ 今 半ば不安け状態で私 本江、元泉香梅草家将丁3人 から五年前、半ば希望に胸をふくら きせ、幸下不遇丁一来年 今また、私は半ば希望に胸をふ 12 3. : 01 の存業の来 獨協大学の 間 であ 3 J. 3

学以外で何をしてきたのか。何 大学であたして たら a F だ。可以わり、あるりにも命言体的 日一日を過ごしてき 良いと思っている。 レヤっ に后空気を中心てきたことだけは にある 下。私 に死すとも可なり」と古え きゃのか。あるいは、 のだ、私は、 る早くさんない 2 の五年間 なシフェ語 持ち に道き附 11. 4 1= 1= " 0

という人間は、ある一つの

物等上型

中

ほど意思の強い人間でなければ、白けてしま は何でもよいに違いないか、 は、今の私にはもはやない、絶対に、あの頃 だろう、誰 テルのようなを変をしたりだった。恋愛とい の甘い敬しい情熱 うより、あれは井思 てからそうか、た、と言、たほうがいい しれない。本もだ 八人間 でも、ある一点に接中して、それ である。正 13 かりしころには、ウェ いだ、た、あり頃の情 二度ともど、てこび 確 1= 松打したっ、 2 の大学へ 1 ,,

減の中で骨身をけず、て、仕事に だ。 だろう ながらな としてくるが、さんが幸は、今の私に いて r; F . この日本という、公言列島の独上資本主 びい、とまれ、私は来年から就職 うう。 私もその白けた状態が五、六年続 いる。その白げた、状態で一生終わ とにかく一生懸命にやるしか いのだ。そんな率を考えると、 励 まなけん व ३ は許さ 3 ゾフ 9 1

-の獨的大学には何の来様もない。

状態で書きない、ているのだ。皆さんいつま だけである。本はこの文を、 でもお達者で、失礼いたす。 わずかな精神的同志と別れるのが辛い 非常に眠たげな

市に、心をきよめる現界であった。 この夫で本の生活、中年の域を脱しは かった。 光度のことを語るとな 然にと、て十世に対する食い

英であり、青い谷にさしのばなれた新 永の憂唇から真、すぐに然えあか、 ト の子であ、た、 .....

へっせ(郷葵)より

可可 しあるのなるのためにからだを震りてあり ~ とこと、神山寺かけれに何いなが ありする。海人生活、三年日を迎之にノンち 目のやいを近せ、寒さか 身にしかる晩で 紅足 よる

行るつけの小科理及の業長の やってり、こう恋くな をめなければあっとなる。 には付けが滑っ 信の中かららあ ···· Ł いって、

者せてたえます。考える時の彼のいつもの府 で、左骨の人差指が異像をさかんにほじくり てわらし …… レ ここで、ノンちゃんは気軽しさうに顔に皺を

て新しい水 ます、他に石凡石場へ行き、治酒の湯をすべ つけました。何ということはない、 ノンちゃん きし、月夜は特別だ。この手で行こう に取 17、早速、行動を開始しま りかえ、ガスをもひわり火を , した。 ンちゃ

す。電明な諸君にはあかりでしょう、そうで 7 **ブルンうぐんは、あれるであ酒を飲む気のの** 手にして、ノンちゃんはニコニコしてありる 現代では、なり見負けられない本製の品益を あります。何かを探しているようです。 「あ、た、 へ行き、何やら呟きかがら、ゴソゴソや、 ころが、ノンちゃんは家族の寝静まった台町 入浴してからだをあたためるらしい。 あ、た、これならいしゃ。

第、山栗の盛 てあります。 え持、てあります。そのはには、徳利、盃、 ちゃんを見ると、例のあ盆を大仰に両与で支 やがて争歌まじりであ风名場に現われにノン られた少四が子際よく来せられ

脱衣場であるむろに衣服を脱いだノンちゃん 「湯加減もよろしいよう 厳粛な面持であ凡石場に入、て来ました 7.

「湾かぶかなあ。」

我せらかてあります。

、て場面に置きました。 不安之うに彼は、弘盛を翻心の注意を払

「ゼーアングート、調鑑「ひらいき」の進水

E 後利に入っているな酒は、あく上の晩的 門の

・ソコリソコリ経濟に貧を流めました。もち ろん、彼の頭には、きちんと愛きれた子状が 白雪なの です、修を流ったノン あゃんぼ

目の前に珍かんでいる記信をみつめなから

ンちゃん は、又もや事愛をはじくり始 め

合ちゃんかかたるあたりか、よし果原や冬に 、や、ばり日本人がええやう… すると小 「今日は強かにしょうかなめ L 。日本 涧 から 3

他の脳裏には、次々と空想の世界が浮かんで リンちゃんは静かに眼をとじます。すると、

……赤坂の高級科亭の一部屋。どこからと

移べて

もなく、唇の調べが聞こえてさいります。ノ が顔をうつむきかげんにして経えてお られ、傍には、 ンラや人の面前には、見事な日本料理が並べ したなあ。山 近頃の小巻さん 着物姿のあでやかな家原士を は、一般と美しくなられま ります。

彼かは、ほほを染めながらら、マえや失ぬを

おひとついかがでる 日相変らず、あ 17 , oi あ上子ですこと、 るめ

とくる盆が揺れています。 かと飲か干すのです。網波 うむ、 ここで、ノンちゃんは初 ありがとう。 めて昼をとり たつ湖の小者のご

がですか? あら、わたくし、全然いただけな いなか 日うし、今宵の酒は格別ですなめ、青女み とご一緒ですと、 D, 3 あひとつい です

そうですか、残念ですなめ、お酒を召し め

もがく続いている、変も事なります。 た。すると、疾然、そう疾症なのです。人生 ちゃんは早くもほう的いなかには、て来まし 内と外から、からにをあたためられて、ノン マそうですわか、食するだけでしたら…… え。でも、折角ですから、僕の功的、食ける だけ、受けてくださいよ。 お酒を飲むと一層、魅力的にいるんですかね かとして、空視の近沿の食品 いとは、資力かたいに見日震しい人の L は、とりもの

起録してきます。でで矣、てまいりますから とうまく此でました。ところが、浴瓊の中の てるい出したことがありますので、失礼して のない、ちょ、としきこん、復、仕事のこと です。容便の在外での彼は、 うやら、全間、全人の境のこもが原因のよう もえのるにりがむするとなってきました。 とは幸に充外はいあっているようです。

彼は、既にからだを動かすのが面倒は程、時

さく傾 糧 力 2 K ti 急。電 ŹU. 一个《公司 えょうとして、会長 i.F かうと 4. 47 47 in Y THE W 70" 2 功學是食けた VP 素質の言となるでれ レド。 T \$ 玶 7 2 II 60 XE. [= 左 で、 あたのも受え Eis 發 0 た絵鑑、 かて ., en fe 2 < 是好。 医额毒品 F= 海 0 T しら L 3 ٥٠ الله i 7 ちゃしい F= V もろ 9 30 ゆうしつ 订治 C 乱 ろれた でする。 2 3 3 .

ヘッド

学ぶ 2 1: 3 do 6 11 and als and the same 3 100 0 F (3 位 CT À 13 t 悩 も とたろ 2 2

合了 今は、分野前とはきるで度、てしま、てあ ますが、時 てから 初夏を 形造の小学館で報 生い に湾 ことがあ もっ十多の経ちます。小学族の遺物 Z, かである。 6° n を散歩に行 च तं せる様 さるで Tā 0 H えていらっしゃると同 でいらっ ととあのるのではつか -々か続 AL も一個 かい後後を容素 新 レヤ ... or À To ं इन 1 巨星 10 de la 4

ドブ した。 ステー t はきまで音楽法 **关**生、 ていた ました。 じんツ語を専攻していた 后和 けて下さいました。あの頃学般の角 て添える事な 先生の問 うさぎょ 你 13° は今年の春学生出に終上院を打 題 びを数日後 を出る人でも本 の湯をの縁 であばれ、 としませんでした。水 どうな、 13 0 たでしょう。 にでするに夢中で 艺 かっ 生心死 む、動物の 17 沫 0 -· して予を じこん

うで 突然ふ、と感じたのです。不是調でし 人としての私がそこにいる事に各づきまし た、きして卒業式を迎む、私は社会の中に入 一多用也。 しきつに足ばやに歩いて 生、 ていきました。朝早く何 やさしるの中で育ちすずに縁な気が した。珍たくえる音が私を捕るて の角で指揮棒を見つめ 私は今までなを取りなく全て てからでした。それは左当に いる中で、私は社会 万人という人が比 るだけの私が します。 たっ いま のも T=

Fren A. C. 市局、 作に気をつけて下さい。 たいと思って やさしさの中から極けなて います。又あ午飲書やます。 生きてい

た川 いずみ

頃

思いなからしばらく見ていた。 おけを取材したものがあ、たので、懐か されがにまにま朝のテレビ番銀に、素人の腹 なるがあ、たことすらもうなれかけていた う訳かつ、はり見かけがくな、た、で、そん には寄席 うななの牧師とんの計へ、近前の人時時 何年かりかで複 などで度々見をか 諡 術を見た、十代の ・近頃ほどうい 爲合 \* 1000

とんじである。人形を完合に独立した一個 び動うが可愛想なくらい知れてしまう人がほ 勿論素人のことだ それ自体が感っているかに見せる所にある。 17 17 するに稽古の容長は、人利を片子であめに際 多以連中が過 とする近には並っならめ将者が必要なの がり、唇を動かるめようにして給も人時 に一回腹談術を習いに来る。姿 から見ていても、唇 の機か

多多日.

こうした中でも玄人はいしの気も

先人意 平凡 6 生む…… きん 73 たもの 七人司 4 4 I 職部所為 泽 で素朴な、さかは のだ、下。ちが落 u 人がた人かり が、 きの物 のおへとつか 初 80 が液治 13 対認がた人意 Få 一通り名が終 々が想像す THE レ総 の雰囲 40 理を立 es & カヤ ימ 13 一色 の袋 S S 到 初 訪 18 尴 ると頑 から風 0 on As n 3 0 いを傾びるのでも のお派 (= 能 4 込んでで 計 da 4. 花人这 初縣水 上を時 1 4 A 16 5. 6 E. 機 0· . . 40 4 色粉 K 1: の標 . 1) 3 8

から Z ちゃ 商商 1 で変 ひゃんだ。人がの 杨 多合意 T. \*\* 43 7 まからた落 でも だらげ いかを説 To M 基 it do 教学会员 ない日常は風帯かも知 でであるとか rá 生きしてめ、 5 剂 すると ハマガ と人間 h 倒 大日玉色バケ er. ere や気みを物 风初 との合意 とと言 艺, 别心 進 es 7 T てみ 光 科· 6= h 10 6 作 Pã . 9 1 17 T 為 3 T. 7 13 14 at ? -th 13 3 75 10 0 1 00 T

不思談 10 か、下り な食話があ いらな 浦 九 去 F . , T • ク うばかりだ。 それでいて 7 人形使以口一体何處上消之 " F. ただ 茂婆と人形 2 0 4

粮 試術者のそ 1 12 7

h 3. 見破られる者は深味のない軽薄な放と評価じられない時代なのだ。もしろ素顔を容易 じられない時代なのだ。 F. 裹 11 2 近して云えばそれだけ人間の素 現代は様 るい人は無暗やたら の: 上 にも仮伯 の横行する時 Ł 台 5 の仮 類以 2

が何て 為け 欠な を眺めょうとする。自己のぶ厚 を厚くして、 んとかして恥ぎだがっている。 の更現 7 テク うことは今 くそ ことだ に生さる、これが今日の更 石 = 1 くらえ。 ガんてもはや奴隷にす 、烧 りてさむめるのだ、仮 その無の方からず 日の社会を生き技 の本者は 极 面は仮 この非情な仮 極 にすぎな 饭饭 う質 了飲 5 雄 く為に不 Ti F. 何 く世 何を努 . 极 1= 倒 何 徽 13 • 7 F 4

体何處 道理下。婚 15。 剪 is して疲 · 7 1= do 取 3 ドだ F 制 相复 行か p 4 羽 は虚 誌 何倒 3 術 いそう のだ、もうみを記憶 に きうに. 像的人 其個 看 1= 1= 76人間 いな、た、その特化 松松 巴の 7. Æ) F 他的局 のだ。 86 ら登息 亭 F. と循環 びあの仮 以衰 稳, T F. 從 して 3 個 13 0 (T ¥

いう も真 不 頹 3 . 5 Sh E みを 7 展 满 頹 ~ 科 -面 話 が経 う O H みたら と思って 7 . 自分 1= 桁 想象を表記 1=13 12 觉现 ri 君 アラフを選 を持 p; 会げ入 F Ž てし 家。 17 え F 「老野の後 の場 少々勝子 虺 3, Ż, 心悟 UT からかい 明 から姿 らき夏美は彩 & :: es いを自然 F. オラ : 2 な根像 -部をえ 多消 9 .. : 8 and by " 50 m 9 E v 寸 75 7. に戻 Û. E •} E i 談 ٤ e e 4= T

490 60

in V

1

物言う

A ...

為怎 43 3 古代エジアト、ギリシャの日本や子言者がこ in の意味 を様 12 小马人形の倒 石科計及で複藝術の意識を調べて外下 のはこうした消息を云うのだみうか。 の一種 さかい 納 E とあった。日本の日間西十三年頃、青 ムラ で神色でおのなる う人間の in としてなられ 三十名兵部、后今日、淮云 物が真真を語 侧 にあるの にたる F きょういが. しいと想像コトラ、 0 2 4 2 なく かりて来 いうことを意味 郊 , T F 3 2 とる 6

の学に 0 FIZ. 認 術 10. 12 中生の統 3 (A) 游戏 (3 437 is vo 7 6 6 6 2 68 イハス ... 4 和 拟 = < の素人恶人。 生の A 待 H とし

不協和者 は たの断片を の動をうるめ

在調しているが いでに現える からかた風信

病人で後で ミラレ 17

現実では ようはえ

外。通りの登場は追縁は 機に話るないで飲むい 顔流があ るう景質的な あといい相差にめ 白いシー れだから うなんてことは 4 の飲い合う者と同じだ

際文は飲望の糸を走らせながら そのかすかな新片の中に 根の間望は こはごなにくだけらま、 シーツのすで かなり後後に動く 3 7

2.

= H 池

なんだ

F B 渝 i 4 13 (e. 0) 4

是、公司出名 0

3 E 見たの (B CI

88

7

0

10 °

25

0

01

**.** 

G

. 4

i きう に気、た

意 银 江 0 崎 の衰縮 1=

1= 10

人 tp 13 京 1 物 8:0 F

一位

< 13 3

Ti · 淑 T= V 01 怎 をつ .

起 ち上 200

图 相和 飛 ひ 込 で 1.

ほんの少し なんのことはない

4

Ł

Z. In. 可滋 ri K 18 r= 4 の前 3 の何で人は智力、 1= 渡 恒 で人は意 1= 合金 となった 10 7 . 3 急を強う きつぶ b

度 ri が言葉を失う者 rj F 合 h 1= 0 d 0 信不 前で にき 4 13" も他を行う bu . いきころ

言葉と失 日常生 i 性を忘 Ti め合 F= 01 溢 V 1) \$10 T 12 F= h Fè う 11 1 秤 B in 3 2 3 f Ti 0) : Ł 附 17 3: 1=

## 編集後記に代えて

であるだろう。 たかい温もりと、 その途上に新らたび東を作り始める。その危 いげは正取りも支えているのは、古染のあた にある。それぞれの道に放立、て、残々は 方栗は、今はもうない、温もりだけが鮮 さこですんだ幾句の知恵 ٤

「食者常難」という言葉がある。大切 E 欠うことなしには、何が本当に大切であ 23 to

58.

所時節に於て成長してきにことの不可欠な悪 たものでなしに、むしみ、人がされかれ じあるに わう. たかを悟れない……それが人生であ 「会者事難」は、決して無情へ象徴とい、 3 11 3 A

的屋様にりえたならば幸せである。 うものであると同時に、「全有等職」の魔器 この文集が、古来の温るりを想いることで

路和四八年度學卷 大かやき電行

1973 Die Deras Wolle.